メテルヴィルの葡萄摘み

—『オーベルマン』第9信の受容について—

萩原直幸

たまたま目や耳にした詩や小説の一節が，それに触れた者のその後の人生を変えてしまうことがある。セナンクールの『オーベルマン』はじめ多岐にわたるフランス文学作品の名訳者として知られる市原豊太がセナンクールの名を知ったのは，東京帝国大学文学部における辰野隆教授の講義においてだった。以下，長くなるが彼の学生時代の回想に聴いてみよう。

辰野先生は教卓に就くと丁寧にお辭儀をされた後，ノートを按じながら，我々の顔の位置よりも稍高い壁のあたりに視線を向けて講義をなさるのが常であつた。そこには先生の含羞があるらしく思はれた。講義はゆつくりと且判然とした口調で筆記し易かつた。

浪漫派先驅者の一人セナンクールは，小説『オーベルマン』によつて文學史に名を列ねる人だが，十九世紀の孤獨感を考へるとき彼を逸することはできない。スイスの山や湖や，フランスではフォンテーヌブローの森などに獨り歩きを愛した此のルソー直系の弟子は，人間の思想的ならびに情緒的な孤獨を，その苦しみと歡びの兩面に亙り，骨髄まで徹して味はつた人であるが，辰野先生は殊のほかこの文學者を愛してをられた。小説の主人公がスイスからフランスに歸つて，懇意な家の葡萄摘みを十日あまり手傳ふ一節がある。先生はそこを引用し，ゆつくりと譯して行かれた。

「……僕の手押車は荒放題な，露に濡れた草で一ぱいの路を往復した。かうして毎日は忘却の中に，霧の中に，葡萄に圍まれ，秋の陽ざしに照らされて過ぎて行つた。夕方になれば，まだ溫かい牛乳の中に茶を注いで飲み，快樂を求める世人を滑稽に思ひ，古い生籬の後ろを逍遙し，心は滿ち足りて眠るのだつた。僕は人生の虛榮の數數を見て來た。胸中には最も廣大な情念の烈しい志操も，社會のさまざまな大問題への關心も祕めてゐる。……諸諸の困難な德目も，僧院の勇猛精進さへも考へて見る。これらすべては僕の魂を燃え立たすことはできる。しかし滿たしてはくれない。葡萄を積んで靜かに押す小さな車の方がもつとよく魂を支へてくれるのだ。この車は僕の時間を穩やかに運んで行き，その節度ある歩みは，人生の家常茶飯によく合ふやうに思はれる」

大學に入つたとは言へ，「一生涯，本を讀み，ものを考へて行く」といふ志だけを抱いてゐた私は，實際には迷ふことのみ多く，徒らに内攻して自らの無力や愚かさに苛立つてゐ

た。

そこへ『オーベルマン』の葡萄摘みの一節を教へて頂いたことは，恰も闇夜に燈(とうしゅ)を得たやうなものであつた。落ちついて緩(ゆつ)くり行けばよいのだ，と私は思つた。その時の靜かな歡びはゴチック風の古い教室のたたずまひと共に忘れることができない[1]。

引用された辰野の訳文は例によって読者を唸らせる名調子である。文学部の講義室でそれを筆記した市原青年もその美文に酔いしれたのかもしれない。フランス語の原文を洒脱な日本語に移し換えるのを得意とした辰野であるが，しかし，上記の訳文にはやや硬い語句や判りにくい表現も見受けられるのである。先ずはセナンクールのテクスト原文を，辰野や市原の訳文と照らし合わせて詳しく注釈してみる必要がありそうである。その作業の後に，この日本人師弟が『オーベルマン』の一節をどのように受容したのか，明治末期から大正時代，昭和初期にかけて，近代日本に生きた知識人の精神史の一齣として考察してみることにしたい。

*　　*　　*

さて，辰野によって引用・紹介されたテクストは，セナンクール（1770-1846）の書簡体小説『オーベルマン』（1804）第9信の後半部であり，手紙の発信地名から通常「メテルヴィルの葡萄摘み」[2]と呼ばれているものである。辰野訳は一見こなれているが，実は原文を読めば読むほど疑問が湧いてくるテクストなのである。少なくとも筆者にとってはそうである。

以下に原文を引用する前にテクストの概観を述べておく。手紙の送り手の青年（以下，「オーベルマン」と称する）は親類縁者から勧められた「実業家」«un homme d'affaires»になることを拒んでスイスに出奔し，自分の進むべき道を模索している。しかし，財産上の係争に巻き込まれて帰国。そのような状況の中で，知人の葡萄園で摘み取りの作業を手伝うことになる。手紙の前半部ではその葡萄園の様子が紹介され，また葡萄摘み作業をしながら心の平安を得たことが述べられている。後半部になって実際の葡萄摘みの情景描写に移る。ここで語られるのはE・R・クルツィウスのいう「悦楽境」«locus amoenus»[3]とまでは言えないとしても，その系譜に準じる田園生活のトポスである。具体的に作品名を挙げると，ルソー『新エロイーズ』（1761）の影響が感じられるし，バルザックの「人間喜劇」の「田園生活情景」に収められている『谷間の百合』（1835）への影響関係も指摘されている[4]。

さて，原文を以下に示すが，叙述の継続性を考慮して，市原によって再引用された箇所よりやや前から始める。使用テキストは市原が使用したと思われる第3版である[5]。第9信にはポンクチュアシオン（句読法）を除けば諸版による異同はあまり無いが，異文（ヴァリアント）は当該箇所の注釈において示す。説明の都合上，ポワン（.）で終わる一文ずつに番号を付し，また，注釈を加える語句に下線を引くことにする。

(1) Il fut décidé à souper que ce raisin, destiné à faire une pièce de vin soigné, serait cueilli par nos mains seules, et avec choix, pour laisser quelques jours à la maturité des grappes les moins avancées.

(2) Le lendemain, dès que le brouillard fut un peu dissipé, je mis un van sur une brouette, et j'allai le premier au fond du clos commencer la récolte.

(3) Je la fis presque seul, sans chercher un moyen plus prompt ; j'aimais cette lenteur ; je voyais à regret quelque autre y travailler : elle dura, je crois, douze jours.

(4) Ma brouette allait et revenait dans des chemins négligés et remplis d'une herbe humide ; je choisissais les moins unis, les plus difficiles, et les jours coulaient ainsi dans l'oubli, au milieu des brouillards, parmi les fruits, au soleil d'automne.

(5) Et quand le soir était venu, on versait du thé dans du lait encore chaud ; on riait des hommes qui cherchent des plaisirs ; on se promenait derrière de vieilles charmilles, et l'on se couchait content.

(6) J'ai vu les vanités de la vie, et je porte en mon cœur l'ardent principe des plus vastes passions.

(7) J'y porte aussi le sentiment des grandes choses sociales, et celui de l'ordre philosophique.

(8) J'ai lu Marc-Aurèle, il ne m'a point surpris ; je conçois les vertus difficiles, et jusqu'à l'héroïsme des monastères.

(9) Tout cela peut animer mon âme, et ne la remplit pas.

(10) Cette brouette que je charge de fruits et pousse doucement, la soutient mieux.

(11) Il semble qu'elle voiture paisiblement mes heures, et que ce mouvement utile et lent, cette marche mesurée, conviennent à l'habitude ordinaire de la vie.

注釈

(1)

une pièce de vin soigné：「特別念入りの葡萄酒」（市原訳）。«une pièce de vin»は「1樽分のワイン（約220リットル）」（『小学館ロベール仏和大辞典』）。

(2)

j'allai le premier au fond du clos：「誰よりも眞先きに園い畑の奥へ行つて（收穫を始めた）」（市原訳）。「最初に」，「一番乗り」して。作業への意欲，意気込みが示される。手前からではなく「奥」からなのは何故か。それは葡萄摘みという作業の通常の手順なのか，それともオーベルマンのはやる気持ちの現れか。次の記述とも関係するが，一番「奥」は人間

にとって最も安らぎを得られる場所である。

clos：「園い畑」（市原訳）。むろん葡萄畑のことである（ワイン通は Clos Vougeot などの銘酒を想起するかもしれない）。熟した葡萄の房を侵入者から護るという理由等により生け垣や塀などで囲いがしてあるわけである。ところで«clos»は語源的に「囲われた場所」を表すが，この「囲い地」にいる者はとりあえず安全である。中世の城郭都市しかり，修道院しかり（Clos Vougeot も元はといえば修道院付属の葡萄園である）。そこには外敵から護られているという安心感がある[6]。しかし，ひとたび囲い地の外に出れば身の安全は保障されない。オーベルマンはこの葡萄園で束の間の平安を味わった後，もっぱらスイスやフランスで放浪生活を営むことになる。

(3)

seul：「獨りきりで」（市原訳）。単独作業に没頭し，«quelque autre»「他の誰か」（市原訳）がいるのを残念がるのは何故だろうか。小麦の刈り取りや葡萄摘みなど，収穫人同士で共に味わう苦労と楽しみがあるはずである[7]。E・ドナールは『新エロイーズ』や『谷間の百合』で描かれる集団的農作業と比較対照して，オーベルマンを「極端な個人主義者」と断じているが，果たしてそう言い切れるか[8]。

lenteur：市原訳では「長閑（のど）かな所」となっているが，要するに「緩慢さ，ゆっくりとしたところ」。(11)節の«lent»「ゆっくりした」と対応している。もし一日毎に収穫のノルマが課されているならば，普通の収穫労働者は出来るだけ手っ取り早く作業を片づけようとするだろう。であるのに，オーベルマンが急がず「ゆっくり」としたペースを守るのは何故か。むしろ彼はこの作業が早ばやと終わってしまうことを恐れているかのようだ。やはり係争中の問題からの逃避心理が働いているのだろうか。いずれにせよ，この「ゆっくり」という心的態度は市原豊太によるこのテクスト受容のポイントになる（後述）。

(4)

les plus difficiles：「一番歩きにくい（道）」（市原訳）。何故わざわざ「最も困難な」道を選ぶのか。(8)節の«les vertus difficiles»「困難な徳目」との関連を考える必要があろうが（後述），ここでは参考までに『オーベルマン』の第91信で語られるサン=ベルナール峠越えの体験を紹介しておく。その時，彼は九死に一生を得たのだが，「僕がもつとも生気に溢（あふ）れ，自分自身にもつとも不満が少く，幸福の陶酔（たうすゐ）にもつとも近かつた」[9]（市原訳）のは，その生死を分けた2時間であったという。「困難な道」が彼に生命感をもたらしたのだった。

oubli：辰野訳では「忘却」，市原訳では「無心」。「一切の雑事を忘却し，あらゆる雑念から解放されて無心に」ということか。また，早朝から霧に紛れてぶどう棚の間を黙々と行き来する彼の姿は，世間からも「忘れられた」存在となっているはずである。それがまた彼には快いのかもしれない。

brouillard, soleil：「霧」と「陽光」が並記されているのは一見矛盾するようである。しかし，朝のうち出ていた霧が，時間の経過とともに晴れていったととるか，もしくは，晴れた日も霧深い日も12日間毎日欠かさず作業に出かけて行った，ととれば矛盾は解消するだろう。いずれにしても，彼の葡萄摘みへの熱中のほどが示されることになる。

(5)

ここで主語が«je»から«on»に替わることが注目される。最初の3つが無冠詞の«on»であるのに対して，最後だけに定冠詞が付いて«l'on»になっているのは，単に母音衝突を避けるためであって，おそらく意味内容に異同はないだろう。いずれも近代フランス語において«nous»の代用として使用される«on»と考えられる。とすれば，葡萄摘みの作業自体は各自単独で行ったのだが，作業後は集団で団欒をとったということになる。ドナールに言わせると「収穫の仲間は不定代名詞によって言及され，亡霊のごとき状態でしか存在しない」[10]そうだが，しかし，以下に見られるように，その団欒の内容はかなり具体的ではある。

du lait encore chaud：「まだ温かい牛乳」（辰野訳）というのは温め直した牛乳ではなく，市原訳のように「搾り立ての牛乳」なのだろう。収穫労働者を慰労するため，一日の作業終了時刻に合わせて搾乳されたのだろうか。しかし，葡萄畑で働いていながら，なぜ毎晩も（過去の繰り返しを表す半過去に注目！）葡萄酒ではなく牛乳なのか，という疑問が生じないだろうか[11]。肉体労働者に酒が付き物であるのは，例えばゾラの小説『居酒屋』を読むまでもなく古今の習わしである。確かに，ミルクティーという飲み物（それも砂糖入りの甘いもの）は，丸一日葡萄摘みという重労働に疲れた体を癒すのにはとりあえず最適な飲み物かもしれない。しかしここでは«des plaisirs»（初版では«le plaisir»）との関連を考えるべきであろう。つまり，「紅茶入り牛乳」という健康的な飲み物[12]を飲むことによって，酒に溺れるという「快楽」への拒否が表明されていると考えられるのだ。時代はやや異なるがゾラの『居酒屋』(1877)で描かれるような「病んだ都市生活」に対する「健康な田園生活」といえば図式的に過ぎようか。

on riait：直訳すれば「嗤うのだった」であるが，辰野訳では「滑稽に思ひ」となっており，さらに市原は「憐れに思ひ」と意訳している。すぐ上で述べたことと関連しようが，(6)節の«vanités de la vie»との関連も考え合わせるべきだろう（後述）。

on se promenait：「散策するのだった」。辰野訳も市原訳も「逍遙し」となっているのは「旧制高校的」な古い言い回しだが，図らずも古代の「逍遥学派」[13]のことが連想される。快楽を追求するより，仕事仲間と何か哲学的議論でも交わしたのか。またルソーの『孤独な散歩者の夢想』(1782) も想起される。

vieilles charmilles：「古い生籬」（辰野訳），「古いあかしでの垣」（市原訳）。おそらく葡萄園を囲むアカシデ (charme) の生け垣，もしくはトンネル状の並木道だと思われる。それは

人を瞑想に誘うような魅惑（charme）を備えた場所であったのか。

l'on se couchait content：辰野訳，市原訳とも「心は満ち足りて眠るのだつた」。少し細かいことをいえば，より正確には「寝るのだった」「横になるのだった」。さもなければどうして眠っている他者の心の中が「満足」だと判るのだろうか。おそらく大部屋で仕事仲間と語り合い，彼等が快い眠りに就く表情を見て，満足しているのは「私」だけではないという印象を得たのであろう。ここにも仕事仲間とのある種の連帯感がにじんでおり，オーベルマンが極端な個人主義者であるとするドナールの説には若干の修正が必要であると思われる。

(6)

ここでまた主語が«on»から«je»に戻る。動詞の時制も，葡萄摘みの情景を描く半過去から，複合過去および現在形へと変化して，過去の経験を経ての現在の感慨へと叙述内容が変わる。

vanités de la vie：「人生の虚榮の數數」（辰野訳），「人生の虚榮を數々」（市原訳）。「虚栄」は語源の「虚しさ，はかなさ」をも含意するであろう。旧約聖書の「伝道の書（コヘレトの言葉）」の冒頭句«vanité des vanités, tout est vanité»「空の空，いっさいは空である」を想起させる。人生の虚しさ，無用性に関して，拙論「無用の人オーベルマン(上)」参照[14]。(11)節の«habitude ordinaire de la vie»と，いわば対句をなしている（後述）。

et：「而も」（市原訳）。順接の「そして」ではなく，逆接の「しかし」あるいは「とはいえ」。「これまで人生の虚栄を数々見てきたが，それでもやはり……」

ardent principe des plus vastes passions：「最も廣大な情念の烈しい志操」（辰野訳），「最も廣大な熱情に對する熾烈な志操」（市原訳）。両者とも「志操」なる語を使用している[15]。しかし「烈しい」「熾烈な」と「志操」との組み合わせ，また「志操」と「情念」「熱情」との組み合わせから，いささかちぐはぐな印象を受けるのは筆者だけであろうか。そもそも「志操」と訳されている«principe»は先ず「原則，原理」を意味するが，場合によっては「根源，原動力」などを表すこともある[16]。この語義を当てはめると，例えば「広大無辺の情熱を生み出す燃えるような原動力」といった訳が考えられる。

ところで初版では«ardent principe de ses plus vastes passions»となっており，«ses»は何を受けるのかという問題があったのだが（vie/cœur?），第2版以降では語句が整理されており，こちらの方が分かり易くなっている。

(7)

grandes choses sociales：「社會のさまざまな大問題」（辰野訳），「社會的な重大問題」（市原訳）。『オーベルマン』が執筆されたと思われる18世紀末から19世紀初頭にかけては，いうまでもなくフランス大革命の嵐が吹き荒れた時代である。「社会的に重大な事態」には事欠かなかったであろう。

celui de l'ordre philosophique：「哲學的世界の（感覺）」（市原訳）。オーベルマンが第1

信において自己の立場を「哲学的」に理解しようと試みていたことが思い出される。著者セナンクールも啓蒙主義の世紀の子として「哲学者たち」の著作を精力的に読み，自らも哲学的著作を発表している[17]。なお，辰野訳にはこれら「哲学」に関する部分が欠けているが，辰野自身が割愛したのか市原が省略したのか，その間の事情は不明である。

(8)

J'ai lu Marc-Aurèle：「マルク・オーレールも讀んで見た」(市原訳)。マルクス・アウレリウス (121-80) は古代ローマ皇帝にして後期ストア派の哲学者。オーベルマンが「読んだ」のはおそらく『省察録』のことであろう。初版ではドゥ・ポワン (：) を介して直前の文を受け，哲学的著作の例として挙げられている。ディドロ (1713-84) が『セネカ論』(1782) を著すなど，18世紀にはストア派への関心が高まった。セナンクールのストア派への興味については J・メルランを参照[18]。

il ne m'a point surpris：「その言葉は僕にとつて少しも不思議なものではなかつた」(市原訳)。直訳すれば「それは僕を少しも驚かせなかった」であるが，いずれにしても，『省察録』の内容が自分の思考と似通っていたということなのか。このことは次の語句の解釈とも関連してくると思われるので，とりあえず先に進む。

vertus difficiles：「諸諸の困難な徳目」(辰野訳)，「いろ〳〵の困難な徳目」(市原訳)。両訳に共通する「徳目」とは何を意味するのか。それは，後述するように，«vertus difficiles» の前後の文との係り具合によって微妙に変わってくるであろう。

héroïsme des monastères：「僧院の勇猛精進」(辰野訳)，「僧庵の勇猛精進」(市原訳)。これらの訳語から日本中世の勇猛果敢な「僧兵」を思い浮かべるのは筆者だけであろうか[19]。『リトレ仏語辞典』によると «héroïsme» とは «grandeur d'âme» を表すとあるので，勇敢な行為のみならず，精神の高潔さも含意することになる。要するに，ここでは修道士の献身的，禁欲的生活を示唆していると考えられる[20]。

さて，ここで先ほどの «vertus difficiles» と前後との係り具合について検討するため，第(8)節を 3 つに分け，説明のため(a)から(c)まで符号を付す。

(a) J'ai lu Marc-Aurèle, il ne m'a point surpris ;

(b) je conçois les vertus difficiles,

(c) et jusqu'à l'héroïsme des monastères.

«vertus difficiles» の前後との係り具合に関して，次の 3 つの解釈が考えられる (図式化して，意味の切れ目をスラッシュ (/) で表す)。

① «Marc-Aurèle» を受ける：(a)(b)/(c)

② それ自体で独立している：(a)/(b)/(c)

③ «des monastères»にかかる：(a)/(b)(c)

① «vertus difficiles»とは文字通り「ストイック」な「徳目」が念頭にあると考えるわけである[21]。ただし，(a)と(b)はドゥ・ポワン（：）で結ばれておらず，むしろポワン・ヴィルギュル(；)で隔てられている形になっているのが気になる。«il ne m'a point surpris puisque je conçois les vertus difficiles»。

② (a)がポワン・ヴィルギュル（；）で終わっているので，いちおう意味の切れ目があると考えるわけである。«je conçois les vertus difficiles, et je conçois jusqu'à l'héroïsme des monastères»。

③ «les vertus difficiles»と«l'héroïsme des monastères»が«et jusqu'à»という語句で結ばれていることに注目。また『ロベール仏語辞典』によると«héroïsme»は«vertu supérieure»を表すので，語彙的にも連関すると考えるのである。«je conçois les vertus difficiles des monastères et je conçois jusqu'à l'héroïsme des monastères»。

以上の3つの解釈のどれを採るか，あるいはどう総合できるか考えてみよう。後期ストア派の哲学は形而上学というよりむしろ実践哲学[22]であるので，その代表的学者の一人マルクス・アウレリウス（の著書）を介して(7)節の「哲学」と(8)節の「徳目」が接続されることになる。さらに，その禁欲的な姿勢（態度）は修道院での生活と結びつきはしないだろうか。結局，(7)(8)節において，オーベルマンは彼なりに社会・哲学・道徳・宗教の世界に関心を抱き，あるいは野心を秘めていたことが示されているわけである。

(9)

animer mon âme：「僕の魂を燃え立たす」（辰野訳），「僕の魂を振ひ起しはする」（市原訳）。«âme»の語源はラテン語の«anima»（生命の息吹き）なので一種の言葉遊びとも言える。「僕の魂を魂たらしめる」つまり「僕の魂に生命（生気）を吹き込んで，潑剌たる魂たらしめる」。

et ne la remplit pas：「しかし満たしてはくれない」（辰野訳），「併し滿たしては吳れない」（市原訳）。この一句によって，上の(7)(8)節で示された社会・哲学・道徳・宗教の世界に対するオーベルマンの関心ないし野心が結局はすべて否定されてしまうことになる。このどんでん返しはそれなりに計算された文章排列であろう。小西鮎子は『オーベルマン』における«remplir»ほか「充たす」ことに関わる動詞の使用を調べ，オーベルマンにおける「充実した生への意志」を指摘している[23]。

(10)

Cette brouette que je charge de fruits et pousse doucement：「葡萄を積んで静かに押す小さな車」(辰野訳)，「葡萄を積んで静かに押して歩くあの手車」(市原訳)。オーベルマンは「葡萄」を指すのに，(1)節において«raisin»の語を使用した後は«fruits»「収穫」で通している。一つには18世紀特有の擬古典主義的語法かもしれない。けれども«fruits»はまた「果実・成果」をも意味する。日々の坦々とした労働が少しずつ「成果」をもたらすという事実を図らずも確認することとなる。

la soutient mieux：「もつとよく魂を支へてくれるのだ」(辰野訳)，「もつとよく魂の支へになつて呉れる」(市原訳)。手押し車を「支える」はずの「僕」が逆に手押し車から（魂を）「支えられる」という逆転の構造。

(11)

elle voiture paisiblement mes heures：「この車は僕の時間を穏やかに運んで行き」(辰野訳)，「この車は僕の時間をおだやかに運んでくれる」(市原訳)。すぐ上で取り上げた文と同じで，「僕が手押し車を運ぶ」のではなく「手押し車が僕（の時間）を運ぶ」という構造。また，«paisiblement»は第9信前半部にある«une paix plus profonde»と照応しているだろう[24]。

ce mouvement utile et lent：「人の役に立つしづかなこの動き」(市原訳)。一義的には葡萄の収穫と運搬の作業を手伝い，葡萄園所有者の知人を手助けしたことを表すが，さらに，この「極上の葡萄酒」が誕生日や婚礼など特別の宴席に供され，それを飲む人々を幸福にするとすれば，それはまた「人の役に立つ」ことになろう。『オーベルマン』における«utile»という単語の使用に関して拙稿「無用の人オーベルマン(中)，(下)」参照[25]。«lent»は既述したように«lenteur»と呼応している。

cette marche mesurée：「その節度ある歩み」(辰野訳)，「節度のあるこの歩み」(市原訳)。訳文としてはそれこそ節度があり悪くないだろうが，実態としては規則正しく足を踏み出す行進曲(marche)，二拍子のリズムを示しているのではないか。一歩一歩，着実に歩みを進めて行くこと。なお，初版では指示形容詞ではなく所有形容詞を使用(«son mouvement»，«sa marche»)。(10)(11)節において«brouette»，«voiture(r)»，«mouvement»，«marche»という単語が「手押し車」を中心に有機的に構成され，レトリカルなテクストになっている。

habitude ordinaire de la vie：「人生の家常茶飯」(辰野訳)，「人生の家常茶飯の慣ひ」(市原訳)。(6)(7)(8)節で述べられた«vanités de la vie»や«grandes choses sociales»，«vertus difficiles»，«héroïsme»といったものと対比される。日常の生活，日々の歩みの意義を再発見すること。

テクストの注釈は以上である。

＊　＊　＊

では次に，なぜ辰野隆が『オーベルマン』の葡萄摘みの一節を講義で紹介し，またそれを聴講した市原豊太が感激したのか，その辺の事情を上の注釈と絡めて推察してみることにする。その際，当時（明治から大正，昭和初期）の時代状況におけるエリート青年たちの軌跡を描いたE・H・キンモンスの『立身出世の社会史』[26]の記述が，辰野や市原の言動と奇妙に（あるいは当然）符合し大いに参考になるので，この書を適宜参照することにしたい。

東京帝国大学仏文科初代教授，辰野隆(1888-1964)は今日ではもっぱらボーマルシェの『フィガロの結婚』やエドモン・ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』等の快活な戯曲の訳者として知られているだろう。出口裕弘によると，２年間のフランス留学中はもっぱら芝居を観て回っていたそうである[27]。帰朝後も『フィガロの結婚』などの戯曲を使って講読の授業をしたが，講義の方の題目は「十九世紀フランス文藝思潮」であり，主として「浪漫主義時代の孤獨感の解説」を行なったという[28]。出口の著書においてはもっぱら人生を謳歌する人というイメージが強調される辰野であるが，学位論文の対象はむしろペシミスティックな詩人ボードレールであった。またセナンクールについてもエッセーを書いており，その中でセナンクールとボードレールとの「相似」について語っている[29]。彼も心の底ではある孤独感を味わっていたのだろうか。実は彼も明治時代後期に簇出した「煩悶青年」の世代に属するのである[30]。ちなみに1903（明治36）年，彼が15歳という多感なはずの時期に，一高生藤村操が華厳の滝で投身自殺を遂げている。

ところで，辰野の父，金吾（1854-1919）は，明治維新という日本にとってはフランス大革命に匹敵するような大変革の時代を生き抜き，「立身出世」を地で行く「成功青年」の一人であった[31]。すなわち，小藩唐津藩の微禄の武士の次男から身を起こし，東京大学工科大学長まで登り詰め，中央停車場（東京駅舎）や日本銀行本店などを設計して当時の「社会的大事業」«grandes choses sociales»に参画しているのだ。後年，息子の隆は「親爺は家を建てるのが商賣で，僕は家を潰すのが商賣だ」[32]と冗談めかして述べることになるが，「人生の虚栄の数数」«vanités de la vie»を子どもの目でつぶさに見てきたことだろう。日清，日露，第一次世界大戦と日本が目まぐるしく発展していく時代にあって，帝大卒は誰しも日本という国家を背負っていくエリートという自負があったはずである(«J'y porte aussi le sentiment des grandes choses sociales.»)。ところが辰野隆は，1913（大正２）年７月，東大法学部を卒業したものの，父親の伝手で紹介された銀行への就職を辞退して[33]，同年９月，文学部に再入学，フランス文学の道へ進むのである。出口の推量によれば，そこには上田敏や永井荷風の影響があるという[34]。またキンモスの時代状況理解によると，高学歴者の増加に伴って伝統

的立身出世が崩壊しつつあり，それに対する代償として哲学・宗教への興味が高まり，また文学が流行したという[35]。青年たちの関心は国家の問題より文学や自我の発見へと移っていく。ともあれ，辰野隆は従来の意味での「立身出世」は拒否したわけである。

次に市原豊太（1902-90）であるが，彼は海軍将校を父に本郷で生まれている。高等師範学校附属小学校・中学校，第一高等学校と順調に進み，文科丙類でフランス語の世界に親しむ[36]。さらにすんなりと帝大仏文科に進むわけだが，育ちの良い彼にはごく自然なコースだったのかもしれない。ところで彼が大学に学んだ1920年代は，第一次世界大戦後，経済ブームが終わりを告げた不況とデフレの時代である。就職に不利な文学部への志願者は停滞するのだが[37]，そのような中で彼が法科ではなくあえて文科を選んだ理由は「『一生涯，本を読み，ものを考へて行く』といふ志だけを抱いていた」からであろう。しかし，大学に入ったものの「模索と彷徨」[38]の日々が過ぎてゆく。彼も遅れてきた「煩悶青年」であったのだ[39]。そのような中で彼の人生を決定づけるような運命的な出会いがあった。辰野教授の講義の中でのセナンクールのテクストとの出会いである。このことは時代を経て繰り返し述べられ，それが市原にとって決定的な経験であったことを物語っている。先ず初めて言及されるのはエッセー「内的風景派」（1939）の中である。「これは嘗て教室で聞き感銘を受けた一節だつた」と前置きした後，その当該箇所を紹介し，葡萄摘み作業の「無心」の意味について語っている[40]。次に，岩波文庫『オーベルマン』上巻（1940）の「解説」の最後に「『メテルヴィル』の葡萄摘みの一章が刻みつけた印象は，その當時の自分の覺束ない心持と結ばれたまゝ，又あの古い教室の寫象と繋がつたまゝ，畢に永く消えることが出來ない。」（p. 15）と記している。さらに，本稿冒頭で引用した「辰野隆先生」（1971）では「迷ふことのみ多く，徒らに内攻して自らの無力や愚かさに苛立つてゐた」と述べていたのはすでに見たとおりである。「覚束ない心持」「迷う」「内攻」「無力」「愚かさ」。いずれも青年期に特有の，多少とも抽象的な語が並んでいる。ところが，講演録「良師良友に恵まれて」（1985）になると，「その時に私は大学の仏文科にはいったのだけれども，いったいこれからさきどういう風に人生を生きていったらいいのか，たいへん迷っておりました。」[41]と，ずいぶん明快である。講演ということもあろうが，晩年の澄明さとでもいうのか，衒いや気取りの無い表現となっている。大学生の市原が抱えていた問題は，要するに，フランス語でいかに「食べて」いくか，といってしまえば身も蓋もないが，しかしやはり切実な問題ではあった。上で見たように，市原の学生時代，ただでさえ日本の社会状況は芳しくなく，彼にも十分影を落としていたであろう。ましてや当時フランス語で「身を立て」ていくのは並大抵のことではなかったはずである[42]。そのような中で市原は辰野教授の講義の中で葡萄摘みの一節と出会い，「闇夜に灯を得た」のである[43]。

ところで，このテクストの何が市原を感動させたのかというと，結局そこから「落ちついて緩くり行けばいいのだ」という教えを得たことであった[44]。自分が選んだ道を地道に，着

実に歩いていくこと。オーベルマンは「僧院の勇猛精進」に理解を示したが，現代の修道院ともいうべき，四方に塀が張り巡らされた大学という建物の，これまた四角い教室の中で[45]，わが市原青年は日頃より敬愛する先生から葡萄摘みの一節を教えられ，静かな歓びに捉えられた。教室という幸福な「囲い地」の中で思い浮かべる，葡萄園という幸福な「囲い地」の情景。

この14歳違いの師弟が共有するもの，それは辰野は大学教授を，市原は海軍将校を父に持つという，恵まれた生い立ちだけではない。この「煩悶青年」世代の師と遅れてきた「煩悶青年」の弟子は，フランス文学への情熱という，戦前の日本においてはそれこそ「熾烈」たらざるを得ない「志操」において結ばれている。法科を出て高級官僚になり，エリートとして日本という国家を背負っていくわけでもない。実業の道に入り，利益を追求するわけでもない。人々の役に立つ社会事業を興すわけでもなければ，哲学者や道徳家や宗教家[46]になるわけでもない。世間からはあまり顧みられることもなく，困難な道（«les chemins négligés, difficiles»）になるかもしれないが，それでも，フランス文学の園[47]に分け入り，詩や戯曲や小説という「果実」を一房一房，手ずから摘み取り[48]，味わい，年月をかけ丹精込めて訳し，日本語作品として醸成させ，熟成させること。時にはそれ自体が馥郁たる香りを放つ文学作品の趣を呈することもあるかもしれない[49]。市原豊太は『オーベルマン』の葡萄摘みの一節に触れて，こらから一読書人としてフランス文学作品を読み，翻訳し，紹介し，研究していこうと決意を固めたのではなかったか。この一文は，やや大げさにいえば彼の文学への信仰告白として読めるのではないだろうか。

しかし，葡萄摘みという行為をいささか文学的営為への比喩に当てはめ過ぎたかもしれない。実のところ市原がフランス文学一筋に生きるには，ある試練と挫折が必要であった。彼は東大を卒業したのち浦和高校にフランス語教授の職を得，次いで一高に招聘されて自分の後輩たちにフランス語を教えるかたわら『オーベルマン』を翻訳，その上巻が岩波文庫に収められる。しかし，日本は戦争への道を進み，下巻の翻訳は中断[50]。敗戦後，彼は「どうにもならぬ氣持から師友の諫めを肯かず家族の反對を無視して」[51]一高教授を辞し，奈良県の山合に引っ込んでしまう。以前から田園生活への憧れもあって，とうとう「囲い地」の外に出たのである[52]。かの地で農作業に従事するかたわら地元の青年達と勉強会を開いたりするのだが，しかし「わづか二年で夢は破れ，おめおめと東京の學校へ再び歸る羽目になつた」[53]。彼が初心に帰ったかのようにフランス文学作品を次々と精力的に翻訳してゆくのはそれからのことである[54]。

奈良の地には市原が揮毫した万葉歌碑が今でも巻向川のほとりに立っているはずである[55]。

注

(1) 市原豊太「辰野隆先生」,『内的風景派』(文藝春秋, 1972, 1977) 所収, p. 212-213.

(2) A・モングロンはセナンクールの伝記研究の結果, «Méterville» を «Villemétrie» のアナグラムと推定している (André Monglond, *Le Journal intime d'Oberman*, Grenoble, Arthaud, 1947, p. 165-p. 171). 筆者はかつてパリの北東にあるヴァロワ地方をサイクリングがてら「現地調査」したことがある. «Villemétrie» の標識を「発見」した時は狂喜したが, 高速道路A 1 号線沿いにあって車の喧しい何の変哲もない土地であった. セナンクールのテクストとの落差! これも「魔法の地理学」のなせる業だろうか (稲生永『魔法の地理学 ― フランス文学紀行』(白水社, 1980) 参照).

(3) エルンスト・ロベルト・クルツィウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』(南大路振一他訳, みすず書房, 1971, 1991), p. 281-p. 286.

(4) Jean-Hervé Donnard, «Balzac inspiré par Senancour?» in *L'Année balzacienne*, N° 8 , Paris, PUF, 1987, p. 192-p. 200.

(5) Etienne-Pivert de Senancour, *Obermann*, édition critique par Gustave Michaux, t. I, Paris, Cornély, 1912, p.52. 市原が翻訳した『オーベルマン』上巻 (岩波文庫, 1940, 1986) の「解説」には使用テキストへの言及がないが, 当時一般に流布していた版は第 3 版であり, 訳文もそれに沿っていると思われる. 辰野の使用テキストについても同じことがいえる.

(6) しかし, 外界より隔てられていることから閉塞状況に陥るおそれもある. «**clos** (...) Se tenir clos et couvert, se tenir en lieu de sûreté, et aussi être peu communicatif.» (*Le Littré-Beaujean*). 注(52)とも関連する.

(7) 「伝統的にブドウの収穫は, その年のブドウづくりの終わりを意味し, 楽しい行事が行われた. 若者たちはお祭りに積極的に参加した (後略).」(マルセル・ラシヴェール『ワインをつくる人々』(幸田礼雅訳, 新評論, 2001), p. 329)

(8) Donnard, *op. cit.*, p. 193 : «Individualiste à l'extrême». 『オーベルマン』第59信には友人らとともに苺摘みを楽しむ情景が印象的に描かれている.

(9) «je fus le plus animé, le moins mécontent de moi-même, le moins éloigné de l'enivrement du bonheur», *Obermann*, édition critique par Gustave Michaux, t. II, Paris, Hachette, 1913, p. 244.

(10) Donnard, *op. cit.*, p. 193 : «Ses compagnons de vendange n'existent qu'à l'état de fantômes, évoqués par un pronom indéfini».

(11) 「収穫が始まると, 誰もが畑のブドウを採って食べる. 誰もがブドウ液を飲んでみたり, 圧搾置場の新しいワインを味わってみる. 誰が, それを禁じたりするだろうか?」(ラシヴェール, 上掲書, p. 331.)「ワインを飲ませることなく健康な収穫人を働かせるなどということは, いかに過去の時代の人にも到底考えられなかったろう.」(同書, p. 324)

(12) 普通は«verser du lait dans du thé»というところを«versait du thé dans du lait»としているのは「牛乳」が主体なのだろう. ところで, セナンクールのテクストと直接には関係しないが, 市原豊太が敗戦前後数年間についてまとめた回想録「山蔭の家」の中に次のような記述が見える.「昭和十一年, 二・二六事件の少し後だつたが, 當時すでに三年近く病臥してゐた亡妻の枕許で, いつそのことこれから何處か田舎へ引込んで酪農をやらうかと彼 (市原のこと＝筆者注) は考へた. 家人に肺を患はれて見て, この病氣がどれほど日本に蔓り, 多くの人を喪はせてゐるかを今更のやうに知り, それは日本人の食生活から來る體質の劣惡さに基いてゐるので, 牛乳, バタ, チーズを多く攝れば豫防も治癒も出來ると思つた.」(上掲『内的風景派』所収, p. 409).「搾り立ての牛乳」という訳語には市原の個人的な感慨が込められているように思われる.

(13) 『哲学・思想事典』(岩波書店, 1998) の「アリストテレス」の項によると, 彼は「335年にアテナ

イに戻り，リュケイオンに学園を開く．散歩しながら議論したことから『逍遥学派 (peripateikoi)』と呼ばれた」．また，同事典の「ペリパトス学派」の項によれば，第3代学頭ストラトン「以後のリュケイオンは，アリストテレスでは形而上学が中心であった哲学の脱中心化が一挙に進行し，人生の問題を主たる関心とする学園となった．」

(14) 萩原直幸「無用の人オーベルマン(上)— *Oberman* における utile と inutile の対立 —」，『岡山大学文学部紀要』第28号，1997，p. 133-p. 144.

(15) 「志操」の語義は『広辞苑』によると「守って変えぬ志，堅いみさお」なので，弟子は師の訳語に対してそれこそ「堅いみさお」を立てているわけである．しかし今日では「彼は志操堅固な男だ」といった表現にかろうじて残っているのみで，語そのものは今や死語と化してしまった観がある．

(16) 『小学館ロベール仏和大辞典』による．この語義での用例として：«le vrai **principe** des mobiles intérieurs de l'homme», *Obermann*, t. I, Lettre I, p. 6. ちなみに同辞典によると「«複数で» (個人，集団の)道徳的規範，主義，信条；徳操，徳義」とある．この語義での用例として：«Un homme qui, sans s'être fait des **principes**, se trouve seul avec une femme, ne se met pas à raisonner ses devoirs», *Obermann*, t. I, Lettre XLII, p. 178. (ボールド体による強調は筆者)

(17) *Rêveries sur la nature primitive de l'homme* (1799), *Libres méditations d'un solitaire inconnu* (1819).

(18) Joachim MERLANT, *Sénancour, sa vie, son œuvre, son influence*, Genève, Slatkine Reprints, 1970, p. 55-p. 61 : «Le stoïcisme de Sénancour».

(19) 「勇猛精進」なる語句は辰野隆のお気に入りなのか，彼の随想「日本人 (二)」(1938) にも見える：「僕は一方に現在のドイツの奮起と勇猛精進とに深甚の敬意を払いながら (後略)」(『辰野隆随筆全集2　え・びやん』(福武書店，1983) 所収，p. 158)

(20) ドナールは『谷間の百合』に見える«règles monastiques»という語句との類似性を指摘している (DONNARD, *op. cit.*, p. 193)．規律に則った労働と黙想と祈りの生活．

(21) いうまでもなく，«stoïque»「克己的な」は«stoïcien»「ストア派の」と関連している．また，以下を参照：«J'ai connu l'enthousiasme des **vertus difficiles** ; dans ma superbe erreur, je pensais remplacer tous les mobiles de la vie par ce mobile aussi illusoire. Ma fermeté **stoïque** bravait le malheur comme les passions ; et je me tenais assuré d'être le plus heureux des hommes, si j'en étais le plus vertueux.», *Obermann*, t. I, Lettre IV, p. 28. (ボールド体による強調は筆者)

(22) 「中期以降のストア派は，ポセイドニオスを除いて，その関心を倫理学に，さらには実践の理論に限定してゆく．」(上掲『哲学・思想事典』，「ストア派」の項)

(23) 小西鮎子「*Obermann* における時間の重み」，『フランス語フランス文学研究』第33号 (1978)，p. 28以下参照．

(24) «En effet, je ne chercherais pas pour les plus beaux jours de ma vie une paix plus profonde que la sécurité de ce court intervalle.» *Obermann*, t. I, Lettre IX, p. 51.

(25) 萩原直幸「無用の人オーベルマン(中)— *Oberman* における utile と inutile の対立 —」，『岡山大学文学部紀要』第30号，1998，p. 195-p. 208.

同「無用の人オーベルマン(下)— *Oberman* における utile と inutile の対立 —」，『岡山大学文学部紀要』第32号，1999，p. 169-p. 180.

(26) E. H. キンモンス『立身出世の社会史 — サムライからサラリーマンへ』(広田照幸他訳，玉川大学出版部，1995)

(27) 「渡仏前，『シラノ・ド・ベルジュラック』をべらんめえ調で翻訳したこの演劇愛好家は，ソルボンヌでの講義などを放り出して，劇場から劇場へ渡り歩く．」(出口裕弘『辰野隆　日仏の円形広場』(新潮社，1999) p. 77)

(28) 「ルネ・カナといふ獨創的な文學研究者の論文に負ふ所が多い，と先生は最初に言はれた.」(市原豊太「辰野隆先生」p. 212).「ルネ・カナの論文」とは René CANAT, *Une Forme du mal du siècle; Du Sentiment de la solitude morale chez les romantiques et les parnassiens* を指すものと思われる．同書の復刻版 (Genève, Slatkine, 1967) で内容を確認したところ，セナンクールや『オーベルマン』への言及はあるが，「メテルヴィルの葡萄摘み」の引用は無い．おそらく辰野が「発見」して彼自身感銘を受けたテクストだったのだろう．

(29) 「先駆セナンクール」,『辰野隆随筆全集 3　フランス文芸閑談』(福武書店，1983) 所収，p. 61.

(30) 「煩悶青年」に関してはキンモンス，上掲書，6 章参照.

(31) 出口裕弘，上掲書，p. 16-p. 45.「成功青年」についてはキンモンス，上掲書，5 章参照.

(32) 市原豊太「辰野隆先生」p. 211.

(33) 親類から勧められた実業家になることを拒んだオーベルマンの姿を髣髴とさせないだろうか．また，以下を参照.「東大仏文科の生みの親であられた故辰野先生は新入生に卒業後就職の公算きわめて小なることを訓示せられ，『諸君は虚業の徒である』と度々言っておられた.」(山田爵「虚業の徒 — 仏文進学者諸君を迎えて」,『フランス文学万華鏡』(白水社，1994) 所収，p. 154)

(34) 出口裕弘，上掲書，p. 53.

(35) キンモンス，上掲書，p. 207-p. 219参照．例えば，「彼 (高山樗牛＝筆者注) はトラピスト修道僧を指して，『富貴名利の外に人生の楽地を求め得たる彼等は幸ひなる哉』という.」(同書，p. 214)

(36) 「今まで英語をやってきたから今度は他の外国語をやろう，フランス語を第一外国語とするクラスにはいろうということで，文科丙類というのにはいりました.」(市原豊太「良師良友に恵まれて」,『フランス文学とわたし』(平凡社，1985) 所収，p. 41)

(37) 「東京帝大文学部への志願者は一九二〇年代の半ばから停滞していた.」(キンモンス，上掲書，p. 269)

(38) 市原の東大仏文二年生在学中の1924 (大正13) 年春から一年間の日記抄の表題．『模索と彷徨 — わが若き日の日記』(東和社，1952)．読書の感想や日々の雑感などが記されている．

(39) ただし，同じ一高生でも藤村操の場合は人生とは何 (what) であるか「不可解」としたのに対して，市原は一高時代，新しい外国語であるフランス語の世界に触れ，バルザックの小説等の面白さを堪能したようである.「東京にある暁星中学という学校に，たくさんのカトリックの神父さんの先生がおられて，その先生の一人がアンベルクロード先生です．(中略) そして，二年生の時にバルザックの長編小説をテキストとしてお使いになりました.『田舎の医者』という長編で，むろん一年間に全部読むことはできませんでしたけれども，しかしそれ以来私はバルザックという作家がすばらしい人であるとしみじみ痛感いたしました.」(市原豊太「良師良友に恵まれて」p. 41)．問題はむしろ大学に進んでからであり，以下に見られるように，いよいよ人生をどのように (how) 生きるか悩むことになる．

(40) 「これらのいはば内的省察の否定は彼等の魂の發展の一つの到達點だらうと思はれる．併し，(『ドミニック』におけるように＝筆者注) 薪を鋸で挽いたり，(『オーベルマン』におけるように＝筆者注) 葡萄を摘んだりする無心の仕事に，深い歓びを見出すといふそのこと自身，彼等の内的風景派たる本領が依然として失はれてゐないのを證明するものではないだらうか.」(市原豊太「内的風景派」,『内的風景派』所収，p. 46)

(41) 市原豊太「良師良友に恵まれて」p. 43.

(42) 「辰野さんは，つねづね，仏文科へ入ってくる学生たちに，おい，仏文なんか出たって食えねえよ，就職は絶無と覚悟しておけ，と放言する癖があったそうだ (後略)」(出口，上掲書，p. 172).「英文科や独文科の羽振りの良さはたんに制度に支えられたものにすぎず，英語やドイツ語が日本の西洋化・産業化に必要な言語として認められている結果にすぎない．それに対して，フランス語は近代日本において，『文学』，つまり国家の干渉を受けない，あるいは国家の意図に反するもう一つの西洋化を代

表していた（と自負されていた）.」（高田理恵子『文学部をめぐる病い — 教養主義・ナチス・旧制高校』（松籟社，2001）p. 135-p. 136）

(43) 「闇夜に灯」とはありきたりな喩えであるが，彼のお好みのイメージのようである．「一方に『こよなき明るさ』が折々あればこそ，それの缺けてゐる時を我々は暗く淋しく思ふのであつて，フロマンタンは小説『ドミニック』の中に，これを廻轉式燈臺が間をおいてキラリと輝く光を放ち，次に暗くなるのにたとへている．又これは，一方で人間の理想が高くなればなる程，他方に人間の現實の惨めさを深く覺えるといふことにも關聯している．」（市原豊太「生き甲斐について」，『内的風景派』所収，p. 64）

(44) キンモンス，上掲書，7章「新しい世代の新しい価値観」の特に2節「過大な野心の『冷却』」参照．「彼（沢柳政太郎文部次官＝筆者注）は日本の青年が自分の将来に関して過大な期待を抱いていると考えており，大学卒業者でさえも緩慢でささやかな出世しか望まないイギリス人 — と沢柳はみていた — のように教育されるべきだと主張していた．もし生徒たちが『大に茲に鑑み』たならば，彼らは『初めから大きな期待をせず唯着々として己が職務に勤勉せねばならぬ事を確信』し，煩悶に陥ることはないだろうというのである．」（同書，p. 228）．「渋沢栄一（中略）も地道な努力の重要性を強調しつつ，『殊に自己が其境遇に応じて全力を傾注して歩一歩，段一段と進歩の軌道をたどつて往けば，信用といふものがついて期せずして求めずして，自から立身出世といふことが出来る』と述べている．」（同書，p. 231）．「僕（新渡戸稲造＝筆者注）が茲に修養法を説くに当つても，我々が平凡なる日々の務を尽すに，必要な心掛を述ぶるを目的とするので，一躍して英雄豪傑の振舞をなし，六ケしい事，世の喝采を受ける事を目的とせぬ．」（同書，p. 232に引用）．以上，傍点による強調はすべて筆者．

(45) 「コンドル博士の設計に成る文學部のゴチック風建築は殊に忘れられない．赤煉瓦に白の角石（すかいし）を使ひ，正面の大きな三角形の切妻にはそれ一杯の薔薇形意匠（ロゼアス）がついてゐた．この美しい建物は，正面を入つて斜め右に進んだ奥にあつたが，そこへ行くまでの間は櫻の老樹を幾本も植込んだクローヴァの茂る前庭になつてゐた．／建物の中に入ると，此處の教室はみな壁が厚く，濃褐色の樺（かし）の羽目板が張られて，陰氣ながらどつしりと落付いた感じだつた．」（市原豊太「辰野隆先生」p. 212）

(46) ただし，市原は若い頃から『法華経』等の仏典に親しんでいたし，晩年には禅語録の注釈書も著している（『無難・正受（日本の禅語録15）』講談社，1979）．

(47) オーベルマンは葡萄園で「人生の家常茶飯」の意義を再確認したが，市原が特に愛好するバルザックの写実主義小説には多くの「日常茶飯事」が描かれている．ゾラらの自然主義小説にあってはなおさらそうである．キンモンスによると，日本の近代文学においても，例えば国木田独歩は「煩悶青年と成功青年の両方を，一人の悩める人間の内に合わせもつ完璧な小宇宙的存在だった」が，彼は「後の自然主義者と同様に，日常生活における茶飯事と悩みこそ文学の真髄だと独断的に信じていた」（上掲書，p. 212）．

(48) ここでいう「果実の摘み取り」，すなわち外国文学作品の「読み取り」にも，実際の葡萄摘み作業におけるのと違った意味で「無心」が必要ではないだろうか．

(49) 「『三人の乙女』— フランシス・ジャムの，ため息のでるほど美しい短編である．（中略）市原豊太訳で，小生など仏文邦訳史上空前の名訳と考える．その市原訳の『オーベルマン』— 仏のセナンクールの孤高の書簡体小説で，この岩波文庫二巻が，古書店でも滅法高い．安くても一巻が千五百円前後している．」（岩男淳一郎『絶版文庫発掘ノート』（青弓社，1983）p. 10）

(50) 「たとへ完成しても到底当時の世に出せるものではなかつたし，又私自身，飜訳をつづける気持になれなかつた．この戦争がどんなに無謀でも，苦しくても，国民の一人として，協力しなくてはならなかつた．（中略）明治の教育を受けた者として，これは自然の心理であつた．」（『オーベルマン』下巻（岩波文庫，1959，1986）「あとがき」p. 330）

(51) 市原豊太「山蔭の家」p.400.

(52) 囲い地にいる者は外界から隔てられているため閉塞状況に陥ることがある.「滿洲事變以來，日本の辿る道が事毎にあやまつてゐることに根ざす將來の不安，憂慮がいよいよ濃くなつて來た時期に，たゞ語學を教へてゐることが，火山の上の舞踏ではなくても晝寢くらゐに思はれて不滿だつた．もとより大きな仕事のできる柄ではなく，世の片隅に生きることが性に合ふと言ひながら，その生き方が小さいなりに何か大きな道に添つてゐないと彼は愉しくなかつた．」(「山蔭の家」p. 409)．また，市原はそのことについて多くを語っていないが(「昭和十九年のはじめ頃，學校の狀態もいよいよ苦しくなつてゐた．夙に支那事變の末期から，年嵩の學生は僅かながら召集を受けて戰地に赴いてゐたが，今やその數は次第に殖えて來た．」(「山蔭の家」p. 410))，一高の生徒や卒業生を少なからず戦地で喪った心の痛みが辞職の遠因になったであろうことは想像に難くない．彼自身の弟もトラック島で戦死している．

ところで，一高の同僚でドイツ語教授の竹山道雄 (1903-84) は『ビルマの竪琴』(1948) の著者として知られているが，高田理恵子によれば，彼はこの小説を書くことにより戦地に散っていった一高生を悼んだのだという (上掲書の「学校小説としての『ビルマの竪琴』」の章参照)．一歳違いの市原と竹山は懇意だったらしく，戦争末期から戦後にかけて，一高の国文学の教授らが巻いた歌仙に一緒に飛び入りしたこともある仲である (この連歌は「時局三吟」と題されてインターネット上で公開されている (2001年10月 4 日現在)．http://homepage1.nifty.com/k-kitagawa/3gin.html)．市原の帰京を竹山も望んでいたという (「山蔭の家」p. 491)．

(53) 「山蔭の家」p. 400.

(54) 戦前に岩波文庫から出していたフロマンタンの『ドミニック』を含め，『オーベルマン』のほかに思いつくものを挙げてみると，デカルト「書簡集」(共訳)，ラ・フォンテーヌ『寓話』，バルザック「ベアトリックス」「捨てられた女」，ブルースト「ソドムとゴモラ」(共訳)，ジャム『三人の乙女』，ヴァレリー「カイエ篇」(共訳)，マチエ『フランス大革命』(共訳) 等々，文学作品にとどまらず哲学や歴史にまで及び枚挙にいとまない．かつての仏文学者にはこのようなことが可能だったのだ！

(55) 「巻向の山邊響みて行く水のみなあわの如し世のひと吾は」(巻七，1269)．「人生の無常を水泡にたとえている」(桜井満) とされる柿本人麻呂のこの歌に市原が託した心境のほどは，ある程度推察され得よう．

Vendange à Méterville

— sur la réception de la Lettre IX d'*Obermann* —

Naoyuki HAGIWARA

Un passage d'un roman français fut l'occasion d'un événement déterminant entre un maître japonais et son disciple.

Toyota Ichihara (1902-90), le traducteur japonais d'*Obermann*, eut connaissance de ce roman épistolaire de Senancour en assistant comme étudiant aux cours sur le romantisme français donnés par Yutaka Tatsuno (1888-1964), premier titulaire d'une chaire de littérature française à l'Université de Tokyo. Ce dernier insista surtout sur le sentiment de la solitude morale chez les écrivains de l'époque romantique et cita entre autre un passage de la Lettre IX d'*Obermann*. Il s'agit là de la récolte de raisins et l'expéditeur de la lettre y raconte comment il connut une paix profonde pendant les vendanges. Ce passage toucha immodérément le jeune étudiant japonais qui hésitait alors sur le chemin à prendre : il se décida à marcher «lentement» dans le «clos» de la littérature française. Il entreprendra la traduction en japonais de ce roman, dont la première partie sera publiée dès 1940, et qui ne sera achevée qu'en 1959, après l'époque troublée de la seconde Guerre mondiale. Il devint ainsi le présentateur au Japon de ce roman peu facile à lire et méconnu même en France. On peut y voir un cas heureux de la réception outre-mer d'une œuvre de littérature française.